

# 飯田館跡発掘調査説明資料

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター 令和7年11月6日(木)・7日(金)

調査要項	
遺跡名	飯田館跡(遺跡番号 201-307)
所在地	山形県山形市飯田
時代・種別	中世・近世(城館跡)
起因事業	飯田土砂災害対策事業(防災安全・急傾斜地)
調査依頼者	山形県村山総合支庁建設部河川砂防課
調査機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
調査指導	山形県県民文化芸術振興課
調査協力	山形市文化創造都市課文化財係
現地調査	令和7年7月8日から11月14日まで
調査面積	1,060m <sup>2</sup>
調査担当者	主任調査研究員 渡辺和行(現場責任者)
調査員	志鎌久悦
検出遺構	溝 ピット 整地(盛り土)層
出土遺物	須恵器 陶器 磁器 瓦(黒瓦) 砥石 古銭



図1 遺跡位置図(1/50,000)

## 1 調査と遺跡の概要

今回の調査は、飯田地区の土砂災害防止事業に伴った発掘になります。調査区は地形によって斜面地と東側の平坦地の二つに分けられます。斜面地については、安全性を鑑み全般的な調査ではなく必要箇所にトレーニングを設定しての調査となりました。また、斜面地の中に存在する平坦地や地形に変化が見られる範囲については1区から3区の調査区を設定して調査を行いました。

東側に位置する平坦地は工事の際に掘削される範囲に4区と5区を設定し全面を調査しています。

飯田館跡は、山形県中世城館遺跡調査報告書(1996)によると戦国期の築城とされています。築城者は飯田播磨守で、現村山市の本飯田地区からこの地に移転して来たといわれています。飯田氏がこの地に来た時期については蔵王地区郷土史(1981)において天

正13(1585)年としています。ただし、飯田氏がこの地に来たとされる明確な史料は判然としていません。飯田氏は最上義光に服属する以前、天童氏を盟主とする最上八館の一角であったとされています。そのため、天童合戦で天童氏が敗北した1584年以降にこの地に移転してきたと想定されます。また、飯田播磨守は1600年にあった東北の関ヶ原といわれる慶長出羽合戦において畠谷城の救援に向かいそこで戦死を遂げています。各史料及び軍記にはその内容が記載されており、この戦いにおいて飯田播磨守が亡くなったのは確実といえます。主のいなくなった飯田館のその後については所説があり判然としません。蔵王地区郷土史においては、安食大和守が5千石にて飯田館に入ったとしています。なお、最上家の分限帳や最上家改易時の史料に載る飯田城は村山市本飯田地区に位置する城跡と考えられています。

地名については1572年の荻生田弥五郎宛

の書状に飯田とみえており、飯田播磨守が来る以前からの呼称といえます。

## 2 見つかった遺構と遺物

今回の調査では、明確な戦国期の遺物並びに遺構が確認できておりません。曲輪と考えられる斜面の平坦地ですが、平坦地を造り出した整地層(盛り土層)から江戸時代の磁器が出土しており、また、それ以降の遺物が含まれておらず、これらは、この平坦地が江戸期に造り出された可能性が高いことを示唆しています。つまり、今回調査した飯田館の南側斜面における平坦地は戦国期の曲輪ではないということがいえます。なお、斜面地においては、地表下20cmほどで岩盤が確認されました。斜面における平坦地では場所によりますが30~50cmほどで岩盤が確認され、深いところで1mほどになるところもあります。斜面地の層順は大きく分けて4層であり上から腐葉土層、旧表土を構成した層、風化礫層、岩盤層となります。この内、遺物を含むのは腐葉土層と旧表土を構成する層で、腐葉土層からは江戸後半期から現代までの遺物が含まれ、旧表土には江戸期に属する遺物が含まれています。

4区東側については畠の造成のため削平されていることが確認出来ました。西側は残存していますが、遺構は確認できておりません。遺物は造成土中に瓦や陶磁器等が含まれており、斜面地同様、江戸期のもののみで、斜面地の平坦地と同時期に造成されたものと考えられます。造成土の堆積状況は厚く1mを超える場所も確認されています。

5区は比較的残存状況がよく、岩盤を掘り込んだかたちで土坑や柱穴等が確認されています。遺物は砥石や陶磁器、古銭(寛永通宝)などの江戸期と考えられるものと、時期は変わりますが古代に属する須恵器など

が出土しています。

## 3まとめ

今回の調査で、南側斜面の平坦地および東側の平坦地西側については江戸期に造成された可能性が高いということが判明しました。この結果から、戦国期と現状の地形とは大きく違うことが確認されました。南側に面し、日当たりがよいことから狭いながらも畠地として活用するため造成したと考えられます。また、その造成土の中から黒瓦が出土しています。調査区付近に瓦を葺く建物(寺など)が存在していたことが想定されます。

飯田館跡は、山形県中世城館遺跡調査報告書(1996)において曲輪の配置などから居館と考えられています。また、畠にするために地形の改変が行われているだろうことも書かれています。今回の調査においては館としての防御施設が確認出来なかったこと、および造成土の存在や畠を作るための削平の痕が確認できたことからその内容を肯定するものとなりました。ただし、地元の方によると南側は屋敷がほとんどなく田園が占め、屋敷地は飯田館跡の北側に広がっていたといいます。次年度、館跡の北側及び西側を調査するため戦国期の遺構・遺物が確認される可能性があり、期待されます。

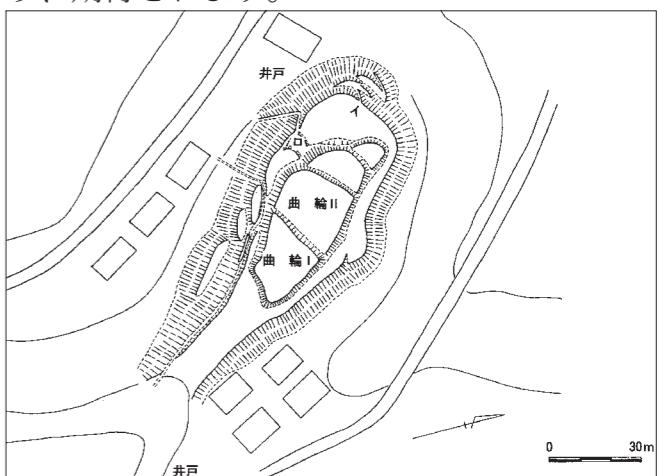


図2 飯田館跡の縄張り図(右が北)

(山形県中世城館遺跡調査報告書から転載)

